

## 明日のために 北朝鮮武官との交流



吉原 瑞穂  
予科 7-7  
航空 11-2  
(吉川市)

ハンガリー大使館の建軍記念式典に招待された。北京に着任（1974. 9. 19.）し一週間目、武官活動の“初陣”である。刻5分前に到着する。会場には、既に多の大使・武官夫妻が参集している。各国武官夫妻については、小生を北京空港に迎えてくれたので、既に面識がある。先の各武官夫妻に挨拶をすると、彼らが自の大使夫妻を紹介してくれる。これから活動の為の“お連れさん”になってもらう方々である。参集者の多くが東欧からであり、質朴な感じの挨拶を返してくれる。

一息ついたところで、まだ挨拶していなかった武官が居るのに気付いた。近づいて握手を求めたところ、手を激しく横に振って拒否された。大校（Senior Colonel）・中校・大尉の三人である。

胸に『金日成』のバッヂを付けている北朝鮮の武官達だと判った。当時未だ国交の無い北ベトナムの武官でも握手だけはかわし、アルバニアの武官とは、若干の会話も

交わした直後である。ホストのハンガリー武官が、「気にするな」と、とりなしてくれた。

その後、各種の参集の機会を重ねるにつれて、他の国の武官達とは、急速に親しさを増していく中で、彼ら北朝鮮の武官達の当方に対する態度は、いつも厳しく冷たいものであった。両国間の歴史的な経緯から当然のことと考えるものの、一衣帯水の隣国の関係がこの儘では、国の安全と国民の平和な生活にとって、等閑に付することは出来ない。だからこそその折角の友好交流の場に臨みながら、その都度“口の中に砂が入った”ような気分を味わうのは嫌なものである。着任早々にして、直面した課題であった。

人間一人の力には、何程の期待も出来ないが、国と国との関係は、所詮、一人一人の人と人との関係の集約である。一人でも融和出来る人を得れば、それがやがて大な力になるものだと、自分に言い聞かせなら、武官連中との交流を深めつつ、「我は、昨日を懐かしむ為や今日を楽しむ為に集まっているのではない。明日を造る為に来ているのだ」「今日は国交が無くとも明日の国交を開く為に来ているのだ」と持論を展開することとした。

その一方で、北朝鮮の武官夫妻とは、会う度に声を掛け握手を求めることとした。初めは拒否していたが、ある時期から握手だけはするようになり、やがて、一定の話をするようになった。彼らは、当時の金日成主席を、「偉大領袖（偉大な指導者）金日成主席」と尊称していた。会話中に「偉大領袖」と言いつつすかさず不動の勢をとって、「金日成主席は・・・」と続ける。

まさしく、戦前の我が国で、「畏くも」ときたら、令なく不動の姿勢をとり「大元帥陛下におかせられては」ときて、令により「休め」の姿勢になったのと同様である。彼らとの会話の中でのそのような場面では、当方も礼として姿勢を正すことにしたものである。末は大海となる岩清水も、始めは落ち葉の下を潜り、小指の先程の小石でも避けざるを得ない。相手の態度がどうあれ、国と民族同士の明日の為に常に親懇な態度で接し、会う機会を重ねる毎に親しみを増し、武官団の会食等でも席を隣に求めて歓談するようになり、日本語で話す機会も増えてきた。

一年半が過ぎたある日、武官団長（東ドイツ武官）が来訪して曰く、「近く北朝鮮の武官が帰国する。ついては、武官団の送別会の幹事が、貴殿の番になる。やってくれるか？」と。国交の無い国の外交官相互の交流は、許されていない。難題である。

しかし、前述したような『明日の為』を称えてきた立場と、北朝鮮武官等夫妻と友好的な関係が発展しつつある現状を考えると、「やらない」という返事は、それらの全てを損なうことになろう。「武官団仕事として小生がやる」と伝える。武官団長は、飛び上がって喜んだ。彼としては日本と北朝鮮の関係を考えて、順序を飛んでやってもらうよう他の武官にも当たってみたらしいが、何れも拒否され困り果てていたとのこと。案内状だけは、武官団長名で出してもらうことにして、設営の全てを小生がやることにした。

当夜の送別会（約 100 名）は、会場の新僑飯店側の好意が上乘せされて、例に無い盛会の裡に終わった。慣例に従って、小生

夫妻が、退席する北朝鮮武官夫妻をエレベーター送る際、武官から、「有り難うございました。機会があったら私の国にも来て下さい」と、流暢な日本語で挨拶があった。家内に対しても、武官夫人から日本語による同様な挨拶があった。

二宮尊徳に、「来る秋は 雨か嵐か知らねども 今日のとめに 田草をぞ取る」とある。その時の“つとめ”に、僅かな汗を流したまでのことである。あれから20年経った。両国の間には、未だ“稔り”の兆しは見え、訪問の約束を果たすことも出来ない。お互いの余算は既に山の端に近づき、最早再会は叶わないだろう。消息を尋ねることも躊躇される。だが、彼の国の何処かで、当方が懐かしむのと同様に彼らも越し方を振り返る中で、思い出しているのではと思っている。

秩父平成11年7月 64号

## 鼓 動

東西ドイツ武官との交流  
コンゴ武官夫妻との交流

吉原 瑞穂 予科 7-7  
(吉川市) 航 11-2

西ドイツ大使館から、新任の武官夫妻が到着する旨の通知を頂き、夫婦で北京空港に赴いた。1976年10月の事である。準備された控え室に入ると、東ドイツ武官夫妻が先着している。先の大戦が終結した後、東西に引き裂かれたドイツ国民の悲劇的な事情については、ここで紙数を割く必要もな

だろう。厳しい状況の下にある筈の両国の関係考えると、『新任の西ドイツ武官を出迎ること』など想像も出来ないことである。無遠慮な質問に、「当然のことだ」との答えである。

世に名高い北京の晩秋の夕焼けが、夕暮れの色に変わり始める頃飛行機は到着し、送迎広場の駐機場に進入してきた。我々武官団一同が、出迎えの場所に向かう間にタラップが横付けされた。突然、小生の隣を歩いていた東ドイツ武官が、急ぎ足で抜け出してタラップに近づいて行った。その様子は、正しく“待ち焦がれた恋人”を迎えるそのものである。長くは待たせず、乗客が降り始める。西ドイツの武官夫妻が降りてくると、真っ先に東ドイツ武官夫妻が近寄り、懇ろな挨拶を交わした後、出迎えの各国武官夫妻の一人一人を丁寧に紹介する。同胞の血がそうさせるのであろうか？ 或いはドイツ民族の強かさがさせるのであろうか？

非情な政治の現状とは著しく乖離した親懇な情景を目の当たりにして、言い知れぬ感動を覚えたものである。日ならずして、東ドイツ武官から、夕食の招待を受けた。場所は、武官の私邸となっている。勿論、喜んで夫婦で参上した。客は、西ドイツ武官夫妻の他、東欧圏とコンゴの武官夫妻を含んで数ヶ国の武官夫妻が招待された。コンゴでは“一夫四妻”が許され、武官自身も、第一夫人から第四夫人までいる。第一夫人は常時北京に残り、他の三人のうちの一人が輪番で帰国して農場の管理に当たるといふ。北京に残三人の夫人達とその各々の子供達を含めた 12 名程が、小生と同じ敷地内の隣に住んでいた。三人の夫人達が、

玄関付近の階段に腰掛けて、日光浴をしながらお互いの髪を結び合うなどして、仲睦まじく過ごしている姿をしばしば見掛けものである。彼との付き合いで気を使うのは、夫妻を招く時の案内状の宛書は、「Col. and Mrs.'s」と、夫人については数形にしておき、適宜の時期に夫人を何人連れてくるかを確認しておかなければならない。この夜は、第一夫人と第四夫人を連れてきていた。第四夫人は、年若く色白の美人で、フランス留学の武官と同等に流暢なフランス語を話す。

食事は文字通りの“手作り”で、主人自ら腕を振るってのお国流のもてなし方は、日本の“囲炉裏端で鋤焼鍋を囲む”雰囲気である。本場のビールとワインを重ねながらの両独武官の話は、歯切れが良く直截である。我々が文書資料でしか勉強することの出来ないヨーロッパの戦史も、彼らは現地に行き現物に触れて学んでおり、その話には臨場感が溢れている。西独武官から、「今度は、日本とだけ組もう」などと冗談が出る頃は、秋の夜も更けきっていた。宴の尾声は、“軍歌演習”となった。武官夫々の歌は、勿論母国語であり、西独の武官と一緒に歌う歌もその歌詞は分からないが、二人が同じ歌を歌っていることは判る。東西に分裂しながら、その国旗は基本的には同じであり、軍人の制服も制帽も、その生地・色からデザインまで概ね似通っている。二人の間に、『ベルリンの壁』は無い。厚く固い凍土の下で、密かに春の蠢きが始まっているのか？ 政治が作る非情な壁を徹して東西に流れる“民族の血の鼓動”を聴いた一夜であった。

あれから 15 年を待たずしてベルリンの

壁は崩れ去り、ドイツは再び一つになった。東ドイツの武官とは、小生が着任した当初から、「考え方のロジックが合う」ということで、既に一年余の交誼を重ねてきた仲であった。この夜を契機にして新たに西ドイツの武官が加わり『話が合う仲間』が増えた。その後の交流を通じて、彼らの質朴謹厚な人柄と、その奥に秘められた優れた識能には尊敬の念を禁じえなかったものである。特に、軍事一般の問題から国の戦争指導体制のあり方・政治と統帥の接点に立つ高級軍人が備えるべき資質と執るべき姿勢等の問題や、政治・社会・経済・心理・文化等の諸要素が、戦争の発生或いは戦争の発展進化に与える強い影響等について備えている広く深い知識と思考方式らは、学ぶところが多かった。帰国後の小生の身上の急変に紛れて、統一の激動の中で両武官夫妻の消息を失った。約束した再会が果たせなかった怨みが残る。いまはただ祖国の何処かで平穏な日々を過ごしてくれることを祈るばかりである。

秩父平成18年7月 92号

ここだけのはなし：その1

## ソ連大使館が爆破された！

吉原 瑞穂 予科7-7  
(東京・広尾) 航空11-2

「ソ連大使館が、爆破された！」

中国特有の“ロコミ”情報が、76年11月の北京市内を駆け巡った。

数日の後、ソ連大使館での『十月革命記

念祝賀会』に招待された。北京市民が、「ソ連の大使館は日本の大使館の10倍以上大きい」と云うのが“白髪三千丈”式の誇張ではないと思わせる程壮大な大理石造りの建物である。正門からは、植え込みのあるロータリーを通して30m以上も離れた広いレセプションルームの内部数箇所が被害を受けている。最も酷いのは、所謂大黒柱（大理石の通し柱）で、幅50cm長さ80cm深さ15cm程が打ち欠かれている。武官の説明によると、「大使館の正門から高性能の爆薬が投げ込まれ、人民解放軍の歩哨が一人爆死し（肉片を残すのみ）いま一人が重体だ」という。

50年代中期から始まった中ソの対立は、ソ連側による国防技術協定の破棄と技術者の総引き揚げから、国境地帯における武力衝突（69年3月～8月）にまで発展し、引き続き各種の事案を起しながら対立の度を深めていた。この頃（76年）の中国の朝野を挙げての反ソ意識は強烈なもので、国家全体を臨戦態勢下に置きながら、上下口を揃えて、「ソ連社会帝国主義とは、将来一万年の間は戦い続ける」と、言わしめていた頃である。

中国国内では、新年早々、文革派からの執拗陰湿な攻撃の中で、周恩来総理が死亡し、続いて『最大の資本主義への道を進む輩』として批判されてきた鄧小平副総理・総参謀長が、天安門事件（四・五事件）直後に失脚（二度目）、7月6日軍の総帥朱徳元帥が死亡、7月28日唐山地震が発生（死者24万余）、9月9日毛沢東主席が死亡する等の悲運が続き、正しく『暗雲低く垂れこめて頭を抑え地を這う』ような陰鬱な前半年であった。

10月初めに所謂『四人組』が逮捕され、代わって華国鋒が党・政・軍の三権を掌握し、経済建設を優先する実務型の指導勢力が台頭したことによって、党・政・軍内の『急進的文革勢力』が一掃されて、10年この方猖獗を極めた所謂『文化大革命』も終焉を迎え、黒雲の一角から微かな光りが漏れ始めてきたような時期であった。

しかし、『四人組』の逮捕そして『文化大革命』の終焉とそれに伴う思想・政治面での急速な変化に対応し切れない分子も多く、変動する時期に起こりがちな混乱や騒動は免れず、状況次第では武力闘争に発展する懸念も捨てきれなかった。この際、「保定市で、軍の爆薬が奪取され、犯人は逮捕されていない」との口コミ情報には、十分な注意を払っていたところであった。

このような情勢の下で発生した今回のソ連大使館の爆破事件を、中ソ双方がどのように処理するか？ 緊張の中で、慎重な注意を集中した事態であった。

結果だけを述べると、両国共に冷静に処理し、表面上は『さざなみ』すらも立たなかった。加えてこの頃から、従来の「一万年経ってもソ連帝国主義とは闘う」との言い方が、「それは、党と党の間のことであって、国と国の関係は別問題である」との言い方へ変化し、逐次後者に比重を掛けた言い方へ変わってきた。事実、当時の両国間の貿易は、質的にも航空機の輸入を含むレベルで行われ、特に、国境貿易は盛んに行われている様子が窺われた。

当時（76年11月下旬）の小生のメモ帳に、次のような記述がある。

「これまでの毛沢東の対ソ路線は、中国共産党内の権力闘争を反映したものであっ

て、ソ連と和解することと、それから発展するかもしれない『ソ連の対中国影響力の拡大』は、『毛沢東の中国』にとって堪えがたいことであった。この為、対ソ関係については、過敏に反応したのではないか」

「毛沢東が亡くなった今後の中ソ関係は、中国の新しい指導者が、党内外からの『毛沢東離れ又は毛沢東の路線に違背する』との謗りを免れつつ、如何に現実的な路線に切り換えていけるかに懸かってこよう」

「実務派指導者や軍部（文武ともに指導的地位にある人にはソ連留学者が多い）の中には、少なくとも、『ソ連との関係にはある程度の調整が必要であり、ソ連との過度の対立と緊張の継続は、中国の安全保障上プラスにはならず、現在のような臨戦態勢の維持とその必要に基づく国防建設への応急的即事的な過度な投資は、経済建設に振り向けるべき資源を制約しその投入を困難にし、経済建設を遅らせ、つまるところ将来を睨んだ本来的な国防建設の為の利益を損なうことになる』との考え方が出てくるのではないかと」。

これらは固より、その真相を把握したものであるのではなく、情報収集の過程で働いた『動物的直観』とでも言うべきものであった。

それから13年後の89年5月16日、ゴルバチョフ大統領が中国を訪問して、『両国間の国交の正常化宣言』に調印し、91年5月16日には、江沢民国家主席が訪ソして『中ソ国境協定』に調印。96年4月26日には『国境地帯軍事安定信任協定』が、97年4月26日には『国境地帯の相互軍事力の相互削減協定』が調印された。その後両国の首脳者レベルの相互訪問が定着し、今や中ソ双方が、隣国との平和な環

境を構築しこれを維持することで、過去の  
ような対立から生まれる国防投資からの重  
圧から免れるようになり、経済建設を主体  
とする全面的な国家建設の為に力を集中で  
きる条件と態勢を整えてきた。

既にソ連は崩壊し、ソ連共産党は執政の  
座を去って久しい。ゴルバチョフ大統領が  
訪中したその日、天安門前広場を占領して  
いた学生達は、人民解放軍の戦車と銃火に  
よって制圧された。しかし、民主化を要求  
する勢力は、引き続きその活動を継続して  
おり、中国国内における現体制の腐敗と強  
引な開発への不満は、各地での暴動となっ  
て現れている。

中国国内での最近の毛沢東批判の出版物  
の多発とそれに刺激された若者たちの毛沢  
東批判の傾向は、未だウネリというには早  
いが、その動きの中から『現体制変革への  
鼓動』が聞こえてきたというのはまだ早計  
であろうか？

秩父平成18年10月 93号

ここだけのはなし：その2

## 中央民族学院参観の際

### <尖閣列島について>

吉原 瑞穂 予科7-7  
(東京・広尾) 航空11-2

中国国防部から招待されて、北京市内に  
ある中央民族学院を参観した。

当時(1975年4月)は、所謂『文化大革命』  
の最中で、中国全土で、血みどろの闘  
争が展開されており、外国人が公の施設を

参観するなどのことは、望んでも適わない  
ことであった。そのような折に、小生夫妻  
と休暇を利用して来ていた娘ともども、し  
かも、日本の武官だけであるとのことであ  
る。

国防部からは、外事局のアジア処長と参  
謀が同行した。学院では、謝氷心学院長(当  
時は、『中央民族学院革命委員会主任』と  
称した)が、数人の職員とともに玄関まで出  
迎えてくれた。謝氷心女史は、日本にも来  
たことがあり、ご尊名は聞き及んでいたが、  
勿論初対面である。小生の肩にも届かない  
小さなお体ながら、荒れ狂う文革の嵐の中  
で身を全うしている方だけに、柔らかない  
応対のなかにも一種の迫力を感じる。

学院長室に案内されて、学院の概況につ  
いてのブリーフィングをいただく。学院は、  
中国各地でそれぞれ独特の言語・風俗習慣  
をもつ五十数種の少数民族の中から、将来  
の幹部要員を選抜して、思想・政治・経済・  
文化・芸術などの分野の知識技能を修得さ  
せて、それぞれの出身民族の故郷に帰って  
指導的な任務に就かせるのだという。国内  
には、当院を含めて9個の学院があり、当  
院はそのセンターの地位にあるのだとい  
う。

学院長自らのご案内に従って、各種の教  
場・居住区(各民族独特の住まい方)などを  
経て、図書館に入る。古来の書籍類から近年  
のものまで、最高学府に相応しい重厚なた  
たずまいである。

ある一角に歩を進めたとき、ガラス張りの  
書棚の中に、一脚の書見台が置かれて、  
その上に一冊の書籍が広げて置いてある。  
見ると、古い時代の中国王朝(注：これを読  
み取っていない)の『釣魚島』に対する権威

が及んでいた趣旨を書いてあり、その部分だけに赤線が施してある。小生としては、「該当する部分にわざわざ赤線まで施した学院側の意図は、本日招待した日本の武官に、古い時代から、尖閣列島に対しては、中国王朝の権威が及んでいたのだということ、古文書を読ませることで感得させようとしたものだ」と、受けとめたものである。

彼ら中国人には、「一定の成果(勢力範囲)を確保する為には、ある程度の強引さが必要であり、それがたとえ些少なことであっても既成事実として押し付けてしまう。それを根気強く積み上げながら、更なる大きな既成事実としてしまう」という特性がある。

小生には、この古文書の内容についてこの場で彼らと議論するに堪える知識はもっていない。かといって、何も発言せず、異議も言わず否定もしなかったとしたら、彼らをして、『日本の武官が、この古文書の内容、すなわち、釣魚島に対する中国の権威が存在したことを認めた』と、認識させる虞が多分にある。

「尖閣諸島は、歴史的にも実効的にも、我が国の固有の領土です」と、きっちりと言った上で、間髪なく、「今日は、私は、この問題について、皆さんと討論する任務と権限を持ってきていません」と、語を接いだ。学院長はじめ、20名ほどの同行者の中の誰からも何らの発言はなく、参観が続けられた。学院生たちの手料理の昼食をご馳走になる間も、学生たちが演ずるそれぞれの民俗芸能を参観する間にも、何回となく、「中日両国人民世代友好下去！(中日両国の人民は、世代代に亘って仲良くし

ていきましょう)」と、友好の気分に含まれた一日であった。

当時、国交正常化した直後のこと、滾るような友好の熱気に包まれて、訪問した先々で、山海の珍味を揃えた宴席を設けて、「中日友好」と言い“日中友好”と言って、乾杯の応酬にあったものである。しかし、友好という言葉の陰にある、『友好とは、自国の国益の為に相手を利用する方便』であるとの誰かの言葉を忘れてはならなかった。自衛隊との友好交流を行うことについては同意しても、寛いだ場面での何気ない会話の中に、『自衛隊の装備が欲しい』とか、『自衛隊の配備、陸海空自衛隊或いは日米両軍の協力体制』などに関することが、包まれている場合などにあっては、俗に言う、『釘を刺される』とか、『言質を与える』等の事があってはならないと、自戒しながら勤務したものである。

秩父平成19年1月 94号

ここだけのはなし：その3

## 外洋海軍を建設します

吉原 瑞穂 予科7-7

(東京・広尾) 航空11-2

「従来、我が中国の海軍は、沿岸の警備をするだけの能力しかありませんが、将来、外洋で行動できる海軍にするよう決定されました」と。1976年11月某日、他用をもって中国・国防부를往訪した際、対応した外事局副局長が、当方からの用件が終わってからの寛いだひとときに、問わず語りに教えてくれたことである。副局長とは、

2年来の交流を通じて、すっかり馴染みになった仲ではあるが、軍の建設についての重要な政策について話したのは初めてであった。

軍隊の近代化建設については、建国未完の時期から、毛沢東によって、『軍事超大国を建設する』『強大な海軍を建設する』との目標が打ち出された。早くも朝鮮戦争の最中からソ連に対して近代的な軍事工業の建設と一流の海軍を建設する為の援助を求め、1953年に始まる第一次五カ年計画の中では、教育・文化・保健への支出を8.2%におさえながら、軍隊と軍事工業へは予算の61%を計上するなど、軍事大国建設のために傾斜的な努力を始めている。爾来、人民の生活は犠牲にしながらも、『軍事大国建設』の目標は、取り下げられることは無かった。

しかしながら、この目標を達成する為の具体的な問題は、対ソ臨戦態勢の維持の為の即事的資源配分と、間断なく続けられた権力闘争のために、時に抗争の具に供せられながら興替を繰り返してきた。とりわけ、ここ10年間の『文化大革命』においては、軍隊そのものが思想政治闘争の主角と化し、更には軍隊の建設を主導すべき数多くの優れた人材が、毛沢東を頭とする『文革派』からの、残虐非道な攻撃の犠牲となって、『軍隊の近代化建設』は、著しく停滞していた。

1976年9月9日、毛沢東が世を去り、10月6日に、江青・張春橋・王洪文・姚文元など所謂『文革四人組』が、逮捕されたのに続いて、上海はじめその他の地方の『文革派の残党』が始末されるに及んで、10年の間猖獗を極めた『文化大革命』が

終焉した。

華国鋒が党中央委員会主席ならびに中央軍事委員会主席の任に当たるとの決議がなされ、その周りに実務型の指導者が選ばれて、国家全体の近代化建設の路線を歩むこととなった。副局長の発言は、新しい指導体制の下での軍隊建設の一端を紹介したものであろう。

小生から、「そうすると、将来、貴国の艦艇と我が海上自衛隊の艦艇のみならず、米国・韓国及びソ連の艦艇が、東支那海及び南支那海から太平洋において行き交うことになりますね。その際、お互いに帽子を振り合いながらすれ違う情勢にあるか、顔を引きつらせ目を怒らせてすれ違う情勢にあるかは、同海域の平和のみならず全世界の平和の維持のために重大な影響がありますね。幸いに、今日の貴国と我が国とは、素晴らしい友好の関係にあります。この状態を、是非とも将来に長く続けて、お互いの艦艇が行き逢ったとき、お互いに航海の平安を祈りあう信号を交わし干切れるばかりに帽子を振りながらすれ違う環境を維持したいものです。同意してくれますか？」と言うと、副局長も、「当然のことです」と言いながら、手が痛くなるほどの硬い握手を交わした。

あれから30年過ぎた。我が周辺海域における中国艦艇の行動は、中国海軍の発展振りを象徴しており、既に脅威感をもって見られるようになってきた。米国も、そのことへの対応を始めているようだ。中国国防部長は、航空母艦を保有したい旨も表明している。

最近、中国の温家宝首相が、南太平洋諸国を歴訪するとの報道がなされたが、これ



が中国海軍艦艇の寄港地を約定することに繋がっていないか気になるところである。若しそうならば、わがシーレーンを中国空母艦隊が遊弋する事態が起こらないか？それは、日米両艦艇の連携を遮断することにならないか？

2005年5月、連休を利用して北京を訪問した小生一家を、国防部や北京部隊の旧友達が、30年前と変わらない友好の態度でもてなしてくれた。

世の様の移り変わりは、ちっぽけな個人の力の及ぶところではないが、世の様を変えるのもまた一人一人の力である。

秩父平成20年4月 99号

## 逆光の記念写真

吉原 瑞穂 予科7-7  
(東京都広尾) 航空11-2

北京に着任して6日目の1974年9月25日、人民解放軍総参謀長への表敬を行った。黄永勝総参謀長が、1971年に失脚して以来総参謀長は欠員のままで、現在は9人の副参謀長が就任していて、そのうちの一人李達副総参謀長(中国共産党中央委員)が代表して筆者の表敬を受けるという。案内された京西賓館(解放軍直営の迎賓施設)に到着すると、待っていた李副総参謀長は、数歩歩み寄って来て筆者を抱きかかえるようにして歓迎の意を表した。国防部外事局の伊左珍副局长・王成銀処長のほか海軍と空軍の副参謀長が陪席している。

着任の挨拶と歓迎の辞の交換などの儀礼的なことが終わると、早速、我が国の自衛

隊の整備建設についての問答が始まった。筆者から、我が国の防衛政策の基本方針を紹介した上で、日米安保体制を基調としつつ、経済の発展と民生の安定を優先させながら、自衛の範囲に限定した節度ある整備を進めている趣旨に沿って紹介する。副総参謀長は、筆者の格段の説明に応分の反応を示し「我々は日本の自衛隊が、真に自国を守ることが出来る能力を持つことを希望する」と締めくくって、我が国の防衛力の整備に対する穏当な理解を表明した。1時間半に及ぶ対談を「またあいましょう。いつでも来てください」と、懇ろな言葉で終えた。

老将軍と記念の写真を撮るため、列席者一同が横に並びまさにシャッターが切られようとするときに、王成銀処長が「ちょっと待ってください、向きが悪い」と、いまままでと反対に向きを変えるよう促した。南向きの窓を背にするので、当然、逆光になる。カメラマンが準備を整える間に、周りを見回していると、正面の横桁に「米帝国主義とその走狗に対する世界人民の闘いは必ずや偉大な勝利をおさめるであろう」と、毛沢東語録の一節を書いた横断幕が掲げられている。中国では、筆者が着任する直前まで、「日本は、米帝国主義の走狗となり、軍国主義を復活させ、軍事大国化しつつある」との批判を続けていた。横断幕に書かれた文言には、当然我が国も含まれている。若し、当初の向きのままで写真を撮ったならば、丁度我々の頭上いっぱいこの語録が写ることになり、今日の出会いの意義からすれば、まことに滑稽な写真が出来上がったことになろう。王成銀処長がこのことに気がついて、逆光になるのも構わず向きを

変えようと提案したのかどうか判らないが、結果からみれば、1時間半に及ぶ今日の対面の意義、特に、李達副総参謀長が、中国人民解放軍の最高の統率者の立場で示した『日米安保体制を基調とする我が国の防衛政策に対する穏当な理解と評価、今後の日中関係、特に、自衛隊と人民解放軍の友好促進についての積極的な希望、対ソ連問題に関する日中共通の立場の主張など、その言葉の本筋に含まれる歴史的な意義』を損なうことが無かったことは幸いであった。

写真を撮り終わって部屋を出る時、横断幕の下に立ち止まって読み返し『今日始まった新しい理解の機運を、押し広げ深めていこう』と、感慨を胸に畳み込んで部屋を後にした。北支那戦域において我が先輩将兵と干戈を交えた八路軍の将軍が、玄関の外まで出て見送ってくれた。